

津波で大破した石巻市立病院（奥の建物）と夜間急患センター



寝たきりの患者を人海戦術で運び出す



入院患者をドクターヘリに運ぶDMAT隊員ら—いずれも14日、田原憲一さん提供



患者150人孤立 ドクターヘリ5機出動せよ

救ったDMAT

大災害の現場にいち早く駆けつける緊急医療チーム「日本DMAT」が、東日本大震災による津波で孤立した宮城県石巻市の病院から100人を超す患者を一日で救出した。寝たきりの高齢患者らをドクターヘリ5機がピストン方式で運び出す。日本で初めての大規模搬送劇だった。

日本初の大搬送

地震発生から4日目の14日早朝、石巻市立病院は津波に洗われたがれきの街にぽつんと立っていた。大阪のDMAT隊員、田原憲一・大阪大高度救命救急センター医師(39)はドクターヘリを降りて、息をのんだ。病院の1階は、巨大な流木やがれきが窓につきささり、床は泥水に覆われている。何台もの乗用車がひっくり返り、重なりあっている。患者150人が残されていた。大半が高齢で、酸素吸入が必要な人や寝たきり状態の人も多かった。水も食料もない。暖房もない。凍える寒さの中、衰弱が進む。病院スタッフは懸命に手を尽くしたが、次々とくたつていく。すでに5人、限界だった。

一方、石巻市立病院から南に約10キロ離れた福島県立医大(福島市)には、大阪、千葉、静岡、山口、福岡など各DMATが乗ってきたドクターヘリが集結していた。「石巻市立病院の入院患者を運び出してほしい」。13日夜、福島県立医大で統括役を務めていた松本尚・日本医大准教授(48)は、宮城県庁にいたDMAT隊から連絡を受けた。重傷者を救うDMATの役割からみると、異例の指示だった。

この病院の患者は大きなけがはない。だが、命を脅かされていることに変わりはない。「絶対やらなくてはいけません」と、松本さんは思った。

翌14日朝、田原さんから大阪チームを皮切りに、5機のヘリが石巻市へ飛び立った。患者は3階と4階にいた。停電でエレベーターは使えない。真っ暗な階段を懐中電灯で足元を照らしながら、患者を抱えてゆっくりと下りる。状態の悪い人から順に、病院前の駐車場跡に着陸したドクターヘリに運び込む。約4キロ北の石巻市総合運動公園へ。そこに自衛隊がキャンプをつくっている。小回りがきくドクターヘリで病院からまず運び出し、キャンプで大きな自衛隊ヘリや救急車に乗り換え、遠方の安全な病院に運ぶ、という計画だった。

30〜40回も往復

DMATのヘリは患者を運び、帰路は食料や水を乗せ病院とキャンプを往復した。計30〜40回往復し、120人余りを運んだ時、日が暮れた。

日没後は飛べない。危険だからだ。残る約30人をどうしよう。自衛隊ヘリで運んでもらうよう交渉、その日のうちに何とか全員救出した。田原さんはこう振り返る。「あと一日遅れたら命を落としたと思われる患者は多かった。今回、僕は治療したわけではなく、『運び屋』に過ぎないと言われるかもしれない。でも、その役目に徹したことで救えた命はあると思う」

(編集委員・中村通子)